

ウォレアイ島からメリークリスマス投下の便り *Merry Christmas Drop from Woleai*

December 12, 2019

By Senior Airman Matthew Gilmore
374th Airlift Wing Public Affairs

グアム島アンダーセン空軍基地発 — “「サンタ31」が向かっている！！”

ミクロネシア連邦のウォレアイ環礁、そしてパラオ共和国の島の住民にとって、北極とも言えるグアム島アンダーセン空軍基地からの無線呼出がクリスマスドロップ作戦を行うサンタ「C-130」の存在を知らせ、毎年少し早いクリスマスを迎える。

「私たちに物資が今日投下されるとの連絡を受け、その知らせが広まると、この島はいつもとは違った空気に包まれる。クリスマスツリーの下に何があるのだろうと興味深々に包みの中身を見るのを待ちわびている子供のように、この島の皆が純粋に興奮する」とウォレアイ島のノースアイランズ中央高校副校長のアレンティーノ・リウギフマル氏は島の様子を語った。

「そのニュースがラジオで報じられると、年中見上げているいつもの空に1機のC-130が私たちがその後何年にも渡り生活で必要とする物資を届けにやってくる。その日がついに訪れ、その輸送機が上空に現れると、クリスマスが早々に訪れたような気分だ」

今年で68年目を迎えたクリスマスドロップ作戦は、世界で最も長く続けられている空中投下訓練のミッションとして、ウォレアイ島などのミクロネシアの55の島に生活必需品を届けただけでなく、太平洋180万海里のエリアに浮かぶ島々に住む長老とその島の人々が一同に会する機会をもたらした。

島の長老たちが集まって誰が何をもらうかを定める物資の分配は、クリスマスドロップ作戦の魔法を共有した皆に、その歴史と同じくらい長く残る沢山の思い出を作ってきた。

「島にとって、毎年クリスマスドロップは特別だ。それぞれに皆、クリスマスドロップ作戦の思い出がある。私にとって最初のクリスマスドロップの時には、初めて靴をもらった。生涯忘れることのない思い出だ。成長しすぎて、サイズが小さくなって靴ずれができるまで、私はその靴を履き続けた。多分その靴に対しての思い入れが強かったのだと思う。私にとってその靴は特別なものだったので、手放したくなかった」とウォレアイ島の住民サントス・ブゴマンさん(18)は話した。

長年に渡り、子供たちにとっておもちゃや靴が思い出深い一方で、長老たちは、食糧、薬、その他の物資を最も大切にしてきた。

「私たちは皆、飛行機が頭上を飛ぶのを見た幼い時の記憶がある。そして成長するにつれて、島にとってクリスマスドロップ作戦の重要性を真に理解した。そう、これらの物資の梱包にはおもちゃも入っているが、何よりなことは、ここに住む500人の村民の食糧となる米を届けてくれることだ。パラシュートとその備品は、ボートの帆と水中銃のワイヤーを作るために使う。物資の一部は学校専用届けられるもので、児童や生徒の成長に必要な学習用品が詰められている」

「これらのアイテムは私たちの生活に必要なものであり、とても感謝している。概してこれらのアイテムとクリスマスドロップ作戦は、私たちをコミュニティとして結びつけるものだ。数人の小学生がカメラに向かって『クリスマスドロップ、ありがとう』と伝えているのを見た。私たちの気持ちは、言葉だけでは表しきれない。この島の村長、長老、学校の子供たち皆を代表して、クリスマスドロップ作戦に感謝したい。長年に渡って共有してくれたすべてのものに感謝の気持ちでいっぱい」とリウギフマル副校長は述べた。

